

進行中です！

知恵と力を合わせた

個性ある地域づくり。



大阿蘇 全国風揚大会
実行委員会会長
熊本風の会会長
船崎直一さん

イベントで心の活性化を！

今年で九回目を迎えた大阿蘇全国風揚大会には、三万五千人が参加。カナダからも百十人が参加するなど国際色豊かな大会となりました。来年は、十回目を記念して、世界大会を開催する予定です。

昭和五十二年八月、大空という大キャンパスに絵を書きたいという気持ちから始めたイベントですが、今で



は、日本一の規模と内容を誇れるまじになりました。

このイベントは、結果として日本一になりましたが、本日の目的は、このようなイベントが起爆剤となって、地域の人々が、この地域の活性化について、真剣に考えるようになってもらうことでした。イベントによる「こころ」の活性化とでもいましょうか。今あるものを単に守るというのではなく、そこからどう創造していくか、何もない場合は、何を創造していくか、考える。それが大切なのではないのでしょうか。そういう意味で、このイベントは、地域活性化のポイントを示しているものだと思います。

風の文化を創造し、風に関する情報が発信できるよ
うになれば
素晴らしい
です。



山鹿百人衆
衆長
松本進さん

地域おこしは、人づくりから

山鹿、鹿本地区の活力あるまちづくりを目ざして結成された「山鹿百人衆」。先人達は、温泉の里をつつたり、八千代座を大衆演劇の城としてまもったり、地域づくりの模範ともいえる活動をつづけたのですが、現代人には、やや、その気概が不足しているような気がします。

しかし、昨年、二十一世紀の地域づくりをテーマにシンポジウムが開かれたのを契機に、「ふるさと振興について住民の英知を集集する場をつくらう」という気運が盛り上がりまじ。

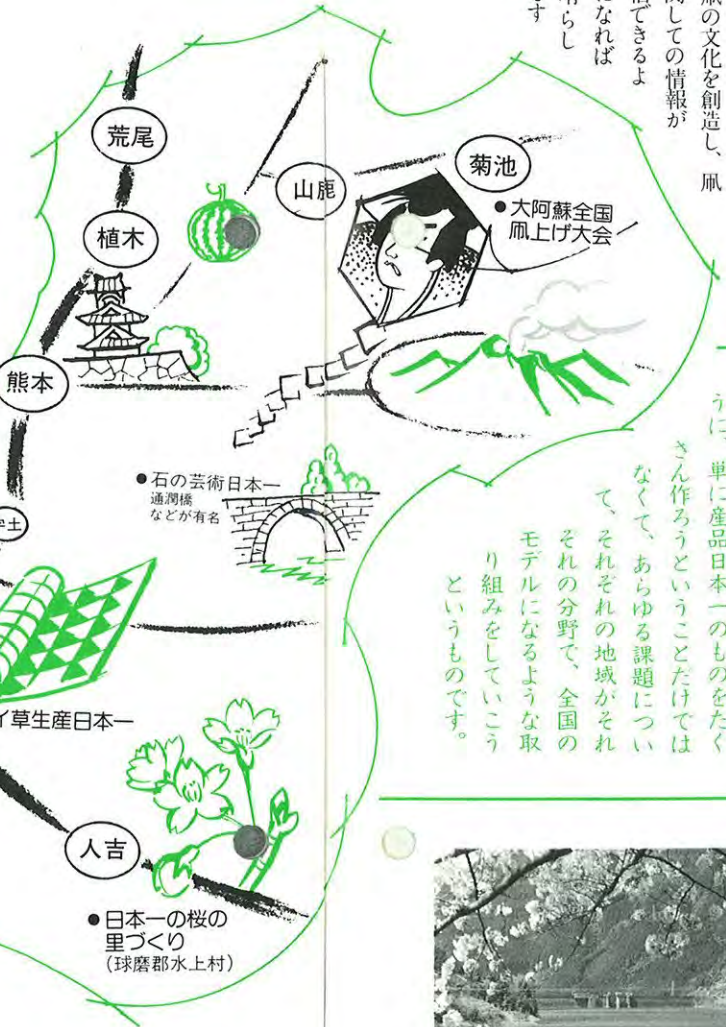
ポトムアップの地域づくりというのでしようか。住民自らが、まちづくりに何が出来るか問い直し、知恵と力を結集するということ、これは、これからの地域の活性化に欠かせぬことだと思います。



山鹿百人衆結成の大きな意義は、自分と異なった考え方を持つ人と多く接触することが出来るようになったことだと思います。

山鹿・鹿本という文字を眺めて、「鹿」によるイメージの統一を図ろうというようなアイデアは、そのような柔軟な発想から生まれてきたものなのです。

とにかく、多くの人に、考えるきっかけが出来て、地域振興の意識を高めることができたと思います。



「くまもと日本一づくり運動推進本部」が設置されたのが昨年九月。以来県内各地で地域づくりが活発になってきています。山鹿百人衆や宇城青年塾のように「人づくり」を目指したものが、中央町の石段や水上村の桜の里などの「地域デザインづくり」。田浦町の甘夏みかん加工や河内町のみかんブランドなどの「産品づくり」。そして、阿蘇地方で繰り広げられる全国風揚げ大会や炎の宴などの「イベントづくり」など、それぞれの地域の特性を生かした形で、活性化が図られています。

日本一づくりというのは、このように、単に産品日本一のものだけをたくさん作るというだけではなく、あらゆる課題について、それぞれの地域がそれぞれの分野で、全国のモデルになるような取り組みをしているというものです。

要は、産業でも観光でも、個性を生かして、そこに全国の人をひきつける魅力あるものを作りだし、そのことによって地域が活性化するという地域づくりをしていくこと。これが、県の提唱している日本一づくりです。

幸い、県下各地域で日本一づくりが広がっていますが、地域間競争はますます激化していくことが予想されます。競争の時代を生き抜く「強い熊本」をつくるためには、今後一層知恵を出し合い、個性ある地域づくりを目ざして力を結集することが大切ではないでしょうか。



水上村 村長
信国守 一郎さん

「桜の里づくり」の次に来るもの

くまもと日本一づくり運動の一環として始めた桜の里づくり。市房ダムのまわりには、すでに一万本の桜を植えており、花の時期になると、全国各地から多くの人がやって来ます。

去る八月二日には、東京プリンスホテルで、デザイナーの秋岡芳夫さんをはじめとする四人のパネラーを招いて、桜シンポジウムを開催しまじ。



村役場が主催者となる東京でのこのような大がかりなシンポジウムは、過去に例がないもので、討論にも熱が入りました。

特に埼玉新聞社社長の竹井博友氏からは、「水上村は、九二%を山林が占める村なので、むしろ山と桜を活かした方法で活路を見出したらどうか」など貴重な意見をいただきました。

桜の里づくりは、桜による集客だけではなく、集まった人々にどのような感動を与えるか、そして、村経済の活性化にどのようにつながっていくかという展開があつてはじめて、地域おこしの核となるのです。

例えば、木工土産品の生産や村独自の産物を販売して活性化を図ろうとすれば、桜が集まった人々に、その製品の自然な素材などをPRすることで販路拡大をめざす。そしてさらに新しいものへと展開していくことが、大切なのではないのでしょうか。



イグサの加工・流通変革に取り組み
奥田拓男さん

産品づくりは、知恵を絞って……

イ草生産で熊本は全国の七六%を占めているんですが、今までは、どうも生産するばかりで、加工技術は遅れていました。

イ草といえば、畳の素材と考えられるのが一般的ですが、最近では、カーペットや家具など洋風インテリアなどにも利用されて人気を呼んでいます。



実は、私も県が東京で行った熊本フェアに、若い層を狙った新しいイグサ商品を出展したのですが、ものすごい反響でした。

イグサの新製品開発は、まだまだこれからといえる未開拓の分野なんです。だからこそ夢がありますし、可能性があるんです。

新製品開発ばかりでなく、畳そのものも、工夫しただけでは、もっと可能性があるのでないでしょうか。まず、これまでに、畳の良さを本当にPRしてきたでしょうか。畳にしよう油をこぼしても、すぐ拭きとればしみになりません。このようなことは、これまで「あたりまえ」のこととして捉えられてきたのですが、あらためて考えれば大変なことなんです。このような効用をもっとPRすれば、畳も、見直されるのではないのでしょうか。